
恋色空模様 佳代子after ~ if story ~

やす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋色空模様 佳代子afterlife story

【Nコード】

N3137Z

【作者名】

やす

【あらすじ】

エロゲ「恋色空模様」の佳代子 アフター。

ただ、ふたりがあまあまなお話しを書いているだけ。

自己満足の世界。 佳代子かわいいよ佳代子。

バカッポーが織り成す、空前の恋物語!?

作者の欲望、趣味がそのまま出てます。

紅葉・・・それは甘い味？（前書き）

今回のテーマは紅葉・・・だったはず！

まあ、かねてからの計画通りあまあまにしてあるんだなこれが。

俺の願望丸出しでお送りします。

紅葉・・・それは甘い味？

今日は学生にとっては長期休み以外ではテンションが上がるであろう金曜日。それも放課後だ。

例によって、俺もテンションが上がっている一人だった。

明日は部活もないので佳代子とゆっくりできるだろう。そう思うと自然とテンションは上がっていくのだった。

「おい誠吾。さっきから何をニヤニヤしているんだ？」

不思議な顔をしながら質問してくる。

「え？ニヤニヤしてたか？それなら、明日佳代子と一日ゆっくり過ごせると思うと自然に・・・な？」

「うっ・・・うっっ・・・恥ずかしいこというなあ！」

頬を赤く染めて照れる佳代子。こういう反応が可愛くて仕方ない。

「俺は考えてたこといっただけだしな。それに話しかけてきたのは佳代子のほうだろ？」

「そ、そうだな。その、あまりにも誠吾がニヤニヤとふしだらな顔をしていたから何を考えたのか知りたくなっただんだ。

「そういえば、明日といえば、明日は一日家にいるのか？」

「そうだなあ・・・家でゆっくりしようか・・・と思ったが紅葉を見に行ってみないか？」

「紅葉？」

「そうそう。」

通学路の周りの木々を見るときれいに赤や黄色に染まり出している。

だから、二人で紅葉を見に行つて季節を感じるのもいいかもしれな
いと思つたのだ。

家でゆっくりするのはいつでもできるが、こつこつ風に季節季節の
行事はその時期によって変わってしまう。

その季節、ひとつひとつを二人で感じていくというのは、なんと
なく、二人でいることを証明しているような気がするのだ。

今回、その目標を達成するにはまず・・・弁当作りか。

「明日は俺がおいしいお弁当を作ろう。手の込んだやつをな。」

「誠吾のお弁当・・・楽しみだな。ただ、手の込んだものでなく
も誠吾の作つたものなら、私は好きだ。」

こんなふうに言ってくれる佳代子のためにも、とびつきりおいしい
弁当を作ることを中心に決めた。

あと、あれも準備しておくか・・・

翌朝。すつきりとした秋晴れで行楽日和である。

朝食はT H E・和食をテーマに、ご飯に味噌汁、きんぴらごぼうに
焼き鮭だ。

今日のこだわりはきんぴらごぼうをピリ辛にしているところである。
これがまた美味しいのだ。

「お兄、今日はどこに行くの？」

「えーと、紅葉を見に行くんだよ。そろそろ見ごろらしいからね。」

「あつそ。ま、二人でイチャイチャしてきなよ。私は藍の家に遊び
に行つてくるから。」

「台所に紙袋が置いてあるかから持つてつて、藍ちゃんと一緒に食

べな。」

「はいはい。じゃ、いつてきます」

「「いつてぶっじゃい」」

なんとなく、言葉の端々に棘を感じないでもない。というか、めちやくちや棘棘してますけど。

「はぁ・・・」

つい溜息が漏れてしまう。

「どうした？溜息をつくって幸せが逃げるぞ？」

佳代子はぱくぱくと朝ごはんを食べつつ話しかけてくる。ちなみにご飯は3杯目である。

俺の作ったきんぴらを美味しそうに食べてくれるので、すごく嬉しい。

「もう少し、美琴の性格が柔らかくなるといいんだけどなと思ってさ。」

「私は美琴は十分兄思いの妹だと思うぞ。今どき、あそこまで兄のことを考えてる妹もいないと思うぞ。」

「そうなのかなぁ・・・俺には分からないが・・・」

美琴がツンドラでおにいちゃんに悲しいよ・・・とか思ってる間に9:30である。

佳代子も食べ終わったみたいだし、片づけして出発するか・・・

佳代子と二人で玄関に並ぶ。それだけの事が嬉しい。

そういえば、久しぶりに佳代子のアレを見たいな。

「佳代子、そういえば真剣を持っていつてくれないか？」

「う、うむ。わかった。持っていく。」

そういつて、自分の部屋に真剣を取りにいった。

一旦は手放した真剣だったが、内海家でアルバイトをする際に使用するらしく

一流品の刀をもらったらしい。切れ味が良くてすごいんだ！と、いつつコンクリートブロックを

一刀両断したときには声も出なかったが。

「さあ、誠吾行こうか。」

「そうだな。」

「……………なあ、誠吾。何でここにいるんだ？」

「まあ、人が来ないのもわかってるし……………な」

俺らが来たのは廃屋のある雑木林である。ここで、情事に及んだこともある思い出の場所だ。

そう、壁に手を着いて……………

「なあ、誠吾。いま、なにか想像しなかったか？」

「ここも意外と色づいているな。佳代子の頬のように。」

「話をそらしたな。まあ……………いいか。」

危なかった……………危つく想像してたことがばれそうに……………

それを隠すように、さりげなく、携帯で時間を確認すると12時を少し回っていた。

「さて、昼ごはんにしようか。」

「おお！誠吾の手作り弁当か！楽しみにしてたんだ！」

そうやって、目を輝かせながらよろこんでくれる佳代子を見ていると、早起きして作った疲れが飛んでいくような気がした。

今日の弁当の中身はいたってオーソドックスだ。から揚げ、タコさんウィンナー、甘めに作った玉子焼き。

特に甘めに作った玉子焼きは佳代子のお気に入りらしい。

「どれも美味しそうだな。何から食べようか迷ってしまつてはないか……」

そういつて、真剣に悩む佳代子。
ひょいっ。パクっ。

「……うむ。やはり誠吾の手料理は美味しいな。この玉子焼きも甘くて美味しいな。」

玉子焼きを食べたらしかつた。佳代子はクールに見えるが、案外甘いものが好きなので

佳代子用はかなり甘めに作った玉子焼きは好評らしかつた。

そうして、二人で食べていくと少し多めに作ったはずだった弁当はすべてなくなつてしまつた。

ここで、もうひとつ準備しておいたアレを出す。

「ほら、佳代子。ドーナッツも作ったんだ。」

そういつて焼きドーナッツを渡す。少し早めに起きたのはこれを作るためでもあった。

ちなみに美琴に朝もつていきなといったのもドーナッツだ。

「…………ドーナッツ。おつ、おいしそうだな。食べてもいいか？」

「いいもなにも佳代子のために作ったんだからな。」

「あ、ありがとう…………」

嬉しそうに笑う佳代子をみて俺もつられて笑ってしまう。

俺は本当に佳代子の事が好きらしいと、こういうところで実感してしまう。

「そういえば、誠吾。私は何で真剣を持ってきたのだ？」

「そうだ！久しぶりに佳代子の居合抜きを見たくなつたんだ。」

弁当を食べたり、ドーナッツを食べたりして忘れていたが、今日一番の目的は佳代子の居合抜きを見ることである。

最初の目的だった紅葉を見るのはどこかへ行ってしまったが、この際気にしないことにする。

「わ、わかった。では、少し離れてくれ。」

「了解」

俺は廃屋の段差に腰を掛けて佳代子の居合抜きを見ることにした。

「はっ」

「やあっ」

一連の動作をピシバシと決める佳代子の居合抜きは本当にきれいだと思う。

何回かつづけてやってからもどってきた。

「きれいだったよ」

「なっ、なな、私が綺麗などと」

「居合抜きが。」

「せ、誠吾！ぐっ……はめたな！」

そういう会話をしているとそろそろ我慢が出来なくなってきた。今すぐ佳代子を抱きしめたい衝動に駆られる。

「佳代子こっちにおいで。」

「う……ん」

俺の意図を察したらしい佳代子は剣を置いて、こっちに近づいてくる。

そして、隣に座ったところで、思いつきり抱きしめた。

「良い匂いがする。佳代子の良い匂い。」

「なっ……私は汗臭いだけだ。」

「いや、佳代子の匂いだよ。俺の大好きな匂い……」

居合抜きをして汗をかくことによって、佳代子の匂いがいつそう強くなってる。

佳代子の匂いをかいてみると、それこそ我を失って襲いそう、そんな匂いだ。

「な、なあ誠吾……ここで……するの……か？」

二人で抱き合いながら、至近距離で頬を染めながらそんなことを言うもんだから

俺の理性は崩壊寸前だった。

したいのは山々だった。それこそ今にもやりたいくらいに。

「俺もしたい。・・・ただな、もう秋でさ、寒くなってきただろ？

だからな、大好きな佳代子が俺とのエッチで

体調が悪くなるようなところなんて見たくないんだよね。だからさ、それは家に帰ってから・・・美琴がいるんだつた・・・」

「あ・・・家ではその出来ないな。それなら・・・誠吾・・・」

「

うん・・・」

そうして、俺達は向かい合って抱き合つたままキスをした。ついでにむようなキスを何回もする。

「ちゅっ、んっ、はぁ、ちゅっ・・・ちゅぱっ」

次第に自制が効かなくなり、キスは深く深く相手を味わうものに変わっていく・・・

「んんっ、ちゅっ、んうむ、んっ、んんっ!!」

舌と舌を絡ませるたび、溶けるような快感に襲われる。

最初は消極的だった佳代子もキスをするにつれ次第に大胆になってきた。

このまま、二人ですつとキスをしていたいぐらいである。

「ちゅっ、んはぁ、誠吾、ん、ちゅっ、大好きだ、んうう」

「んっ、俺も大好きだ」

唾液を送り込んだり、受け入れたり、二人がひとつになっていくような感じになる。

佳代子が送り込んでくる唾液は温かくて甘い。

「んんっ、ちゅぱっ、んふう、はあはあ」

「はあはあ。佳代子の味がする」

「私も、私も誠吾の味がする」

そういつて、お互いに笑いあう俺達。

こういう普通が一番幸せなんだ。今回の廃校騒動、佳代子の家庭の問題でよくわかった。

「なあ、誠吾、あそこに寝っ転がらないか？」

「いいよ。ちよっと、座ってるのには疲れてきたし。」

そうして、二人並んで寝っ転がる。

しかし、俺はもっと距離をゼロに近づけたかった。

それは、佳代子も同じだったみたいで……

「んっ、ちゅっ、んはあ……」

寝っ転がったまま抱き合いキスをする。今度はさっきまでのように深いものではなく、触れ合うだけの軽いキス。

一通りキスをした後は二人抱き合いながらぬくもりを確かめ合う。

「誠吾は……暖かいな。とつても、やさしい温もりだ。いつも、その……してるときにも、誠吾のぬくもりを感じると安心するんだ。」

「佳代子も、あったかい。やわらかくて、あったかくて、俺のそば

にいてくれると実感できる。」

「・・・」

「ん？佳代子？」

「・・・」

返事がない。ただの屍のようだ・・・佳代子が屍になったら、俺は・・・俺は・・・とか、そんなことを考えながら、顔を覗いてみると、幸せそうに寝ていた。

起こすのも可愛そうだったのでそのまま寝かしてあげることにした。しかし、俺も男の一人。それも好きな女の子と抱き合って寝てるといふとやはり反応するやつが・・・

あー・・・あの体操服でのプレイは・・・

やめよう。考えるのをやめるんだ。無心だ！無心だぞ、俺！

という葛藤もあつたが、早起きしていろいろと準備したからか、佳代子と抱き合ってる安心感からか俺も眠くなってきてしまった。

「佳代子。大好きだぞ・・・」

・・・

・・・きる。

「ぶえつくしよーいっつ！さっむっ！」

「だから、起きろといったじゃないか・・・」

「って、もう夕方!？」

「ああ・・・その・・・二人でぐっすり寝てしまったらしい。」

携帯の時計は5時17分を示している。夕日が3分の2落ちている。

「寒くなってきたから帰るか。風邪引いたらあれだしな。」

「う、うむ。行くか・・・しかし、紅葉を見に来たはずが・・・」

「気にしたら負けだ。俺は佳代子と過ごせればどこだってよかった

「んだけどな。」

「わたしだつてそうだ。誠吾がいればどこだつて……っ！」

雑木林を日が暮れる前になんとか出ることが出来た。

しかし、ここらは通学路だつてのに暗い……それに寒い。

「いやあ、寒いなあ。もう冬みたいな寒さだな。」

「そうだな……こ、こうすれば暖かいだろう？」

そういつて、佳代子は俺の腕に抱きついてきた。

あ、あたたかい。それも至近距離で佳代子の顔を眺められるオマケつき。なんとという贅沢……ただ

「これじゃ歩けないな。」

「そうだな……それなら腕を組もう。」

「私達はカップルに見えるだろうか？」

「きつと、バカカップルに見えるだろうな。」

「それは……でも、バカカップルに違いない」

そんなことを話しつつ家に帰る俺達であった。

「あ、夜ご飯のしたくしてねえぞ……はあ……また美琴に怒られる……」

紅葉・・・それは甘い味？（後書き）

次はさ・・・エロシーン書きたいな。

エロい佳代子さんの破壊力は・・・

今回はディープリキスまででしょ。

次こそエロシーンッ！

あ、でも、それやると、作者の趣味がばれちゃうかも!？

小説についてですが、今回のこの作品はシリーズものにする予定。
pixivにも投稿してるよ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137z/>

恋色空模様 佳代子after ~ if story ~

2011年12月10日23時55分発行